



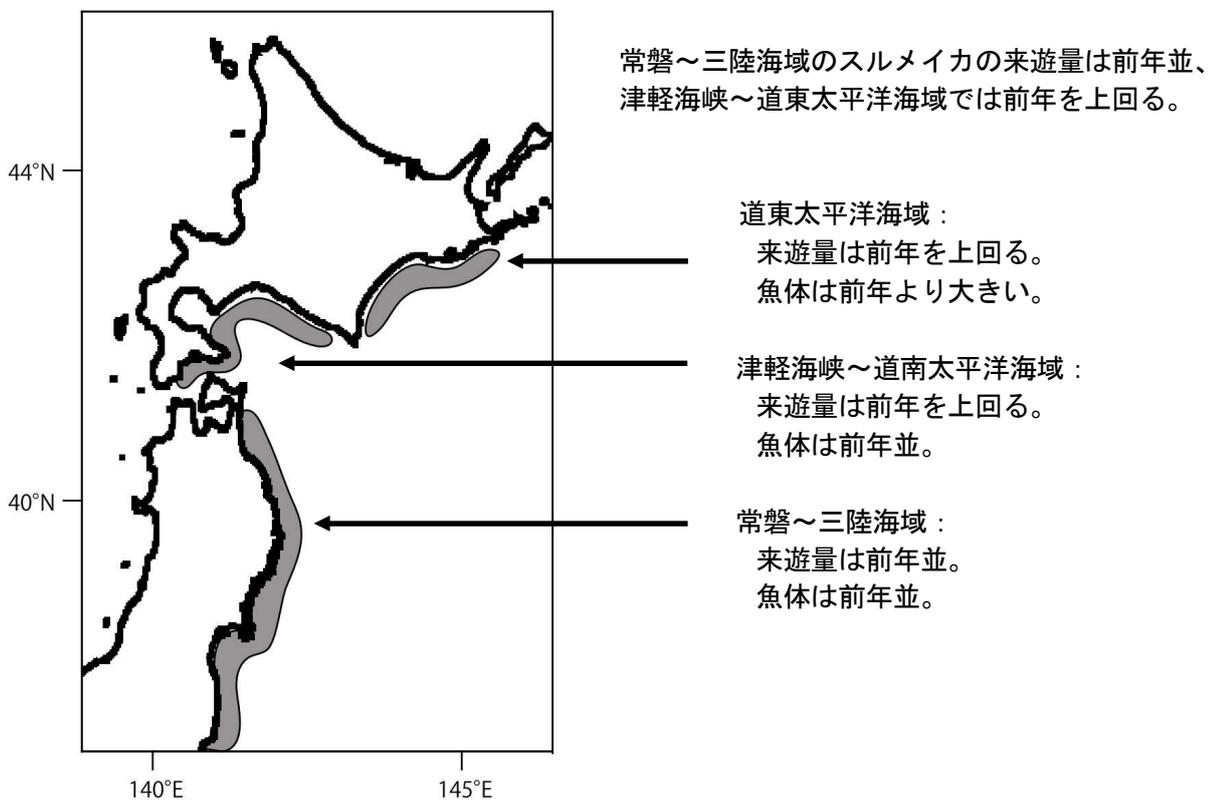
2020年7月29日

国立研究開発法人 水産研究・教育機構

2020年度 第1回 太平洋スルメイカ長期漁況予報

— 別表の水産関係機関が検討し国立研究開発法人水産研究・教育機構
水産資源研究所がとりまとめた結果 —

今後の見通し(2020年8月~9月)のポイント



問い合わせ先

国立研究開発法人 水産研究・教育機構
担当：管理部門 渡邊、木村
浮魚資源部 西田、岡本
電話：045-788-7615、ファックス：045-788-5001
当資料のホームページ掲載先URL
<http://www.fra.affrc.go.jp/pressrelease>

2020年度 第1回 太平洋スルメイカ長期漁況予報

今後の見通し（2020年8月～9月）

対象魚種：スルメイカ

対象海域：常磐～三陸海域、津軽海峡～道南太平洋海域、道東太平洋海域

対象漁業：いか釣り、底びき網、定置網、まき網

対象魚群：冬季発生系群（2020年級群）

1. 常磐～三陸海域（いか釣り、底びき網、定置網、まき網）

- (1) 来遊量：前年並。
- (2) 漁期・漁場：対象期間を通じて漁場となる。
- (3) 魚体：前年並。

2. 津軽海峡～道南太平洋海域（いか釣り、定置網）

- (1) 来遊量：前年を上回る。
- (2) 漁期・漁場：対象期間を通じて漁場となる。
- (3) 魚体：前年並。

3. 道東太平洋海域（いか釣り、底びき網）

- (1) 来遊量：前年を上回る。
- (2) 漁期・漁場：漁場形成は散発的で、明瞭な主漁期は無い。
- (3) 魚体：前年より大きい。

I 予報の説明

2020年5月下旬～7月上旬に実施したスルメイカ漁場一斉調査と日本海スルメイカ北上期調査¹⁾の結果（図1～3；以降、いか釣り調査と総称する）、および6月までの漁況経過の結果（表1）を主要な情報として8月～9月のスルメイカの来遊量を予測した。その結果、以下の通り、常磐～三陸海域では前年並、津軽海峡～道東太平洋海域では前年を上回ると予測される。なお、いずれの海域においても前年の漁獲量は近年5年（2014年～2018年）平均を下回っていた。

¹⁾ 北海道立総合研究機構函館水産試験場が独自に実施。

1. 常磐～三陸海域

この海域の漁獲対象資源は、太平洋沿岸域を北上する群れを主体に、津軽海峡を通過して来遊する日本海由来の群れが一部含まれると考えられる。三陸周辺海域（41°N以南、143°E以西）におけるいか釣り調査でのCPUE（いか釣り機1台1時間当たり漁獲尾数）は前年を下回った。一方で、各地域における6月までの漁法別の水揚げ量やCPUEは、前年並もしくは前年を上回っていた港が多かった。したがって、太平洋沿岸域を北上する群れの来遊量は前年並と予測される。6月中旬～7月上旬に日本海の津軽海峡西口周辺海域（39°N～42°N、138°E～140°E）で実施されたいか釣り調査の結果では前年を上回ったことから、日本海由来の来遊量は前年を上回ると予測される。また、前年は8月以降、移行域幼稚魚調査（5月上旬～6月上旬）で採集された外套背長4cm前後の群れが成長後に来遊したことで漁獲量が増加したと考えられるが、本年の調査では前年より小さい個体（外套背長1cm前後）が多く採集されたため、沿岸域への来遊は主に9月以降になると考えられる。以上の調査結果、およびこれまでの漁況の経過と後続群の来遊想定時期から、常磐～三陸海域への来遊量は前年並と予測される（前年の漁獲量は近年5年平均の漁獲量を下回っていた）。魚体サイズは、太平洋および日本海でのいか釣り調査結果から、前年並の個体が主体になると考えられる。

2. 津軽海峡～道南太平洋

この海域の漁獲対象資源は、太平洋沿岸域を北上する群れと津軽海峡を通過して来遊する日本海由来の群れが含まれると考えられる。津軽海峡東口周辺海域（41°N以北、143°E以西）におけるいか釣り調査でのCPUEは前年を上回った（前年は漁獲無し）。6月に函館港に水揚げした小型いか釣り漁船のCPUEは前年並であった。また、「1. 常磐～三陸海域」で記述した通り、太平洋沿岸域を北上する群れの来遊量は前年並で、日本海由来の来遊量は前年を上回ると予測される。以上のことから、津軽海峡～道南太平洋海域への来遊量は前年を上回ると予測される（前年の漁獲量は近年5年平均の漁獲量を下回っていた）。魚体サイズは、太平洋および日本海でのいか釣り調査の結果から、前年並の個体が主体になると考えられる。

3. 道東太平洋

この海域の漁獲対象資源は、太平洋沖合域を北上する群れと考えられる。沖合域（143°E以东）におけるいか釣り調査でのCPUEは前年に引き続き低い水準で推移したものの、漁獲が有った調査点の割合は前年を大きく上回った。また、親潮の第1分枝の張り出しは極めて北偏で推移し（2020年度第2回東北海区海況予報¹⁾）、道東沿岸域の水温は前年より高くなると予測されていることから（図4、水産研究・教育機構の海況予測システムFRA-ROMS²⁾）、前年より道東沿岸域へ北上回遊しやすい環境であると考えられる。以上のことから、道東太平洋へのスルメイカの来遊量は前年を上回ると予測される（前年の漁獲量は近年5年平均の漁獲量を下回っていた）。ただし、前述の通り調査CPUEは低い水準のままであるため、漁場形成は前年同様に散発的で、明瞭な主漁期は無いと予測される。魚体サイズは、沖合域でのいか釣り調査結果から、前年より大きい個体が主体になると考えられる。

¹⁾ <http://www.fra.affrc.go.jp/pressrelease/pr2020/20200619/>

²⁾ 国立研究開発法人 水産研究・教育機構により開発され、2012年5月より運用を開始した海況予測システム。

II 調査結果

1. 太平洋第1次スルメイカ漁場一斉調査

5月下旬～6月下旬に太平洋で実施されたいか釣り調査の結果、調査海域全体の平均CPUE（いか釣り機1台1時間当たり漁獲尾数）は0.03尾であり、前年（0.05尾）並に低い水準であった（図1、2）。海域別にみると、三陸周辺海域では0.08尾であり、前年の0.15尾を下回った。津軽海峡～道南太平洋海域では0.06尾であり、漁獲の無かった前年を上回った（ただし、全調査点6点のうち有漁点は1点であった）。沖合域では0.02尾であり、前年（0.01尾）に引き続き低い水準で推移したものの、有漁点の割合は26%であり、前年（6%）を大きく上回った。

漁獲物の外套背長組成は9～17cmに分布し、前年（10～15cm）より幅広く分布していた。海域別にみると、三陸周辺海域では最頻値が12cmで前年（13cm）並であったものの、頻度分布は前年よりも外套背長の大きい方に広がっていた（図3）。津軽海峡～道南太平洋海域の漁獲物は13cmと15cmであったが、前年は漁獲が無かったため比較ができなかった。沖合域では最頻値が14cmにあり、前年（11cm）より大型であった。

2. 日本海スルメイカ漁場一斉調査（2020年度第2回日本海スルメイカ長期漁況予報の結果より引用・改編）

6月中旬～7月上旬に津軽海峡西口周辺海域（39°N～42°N、138°E～140°E）で実施されたいか釣り調査の結果、平均CPUEは3.0尾であり、前年（0.2尾）を上回った。外套背長組成は13cmと16cmが高頻度の二峰型を示し、前年（最頻値16cmの単峰型）より小型の個体が多く分布した。

3. 移行域幼稚魚調査

5月上旬～6月上旬に常磐～三陸沖の太平洋で実施された表層トロールネットによる調査の結果、外套背長10cm未満のスルメイカの幾何平均CPUE（30分曳網当たり漁獲尾数）は41.7尾で、前年（10.5尾）を上回った（図5）。また、全調査点のうち有漁点の割合は92%であり、前年（61%）を上回った。漁獲物の外套背長組成は1cm台に最頻値があり、前年（4cm）より小型であった（図6）。

III 各海域の漁況経過

2007年以降の太平洋（根室海峡～オホーツク海を含む）における年間漁獲量¹⁾は7万～16万トンで推移していたが、2018年には1.7万トンまで減少した（図7）。2019年は僅かに増加し、2.4万トンであった。主漁場は常磐以北の太平洋海域であり、来遊経路から常磐～三陸海域と津軽海峡～道南太平洋海域、道東太平洋海域に区分される。太平洋海域での2019年8月～9月の漁獲量（生鮮）は7.0千トンであり、そのうち常磐～三陸海域では5.7千トン、津軽海峡～道南太平洋海域では0.8千トン、道東太平洋海域では0.1千トンであった（図8）。近年5年（2014年～2018年）平均比は、常磐～三陸海域では63%、津軽海峡～道南太平洋海域では32%、道東太平洋海域では2%であった。なお、根室海峡～オホーツク海と千葉県以南の海域での合計の漁獲量は0.3千トンであった。

2020年5月～6月の太平洋沿岸主要港での水揚げ量²⁾（生鮮：速報値、一部未集計）は389トンで、前年（590トン）を下回った。常磐～三陸海域の主要港では303トンで、前年（493トン）を下回った。津軽海峡～道南太平洋海域の主要港では40トンで、前年（61トン）を下回った。千葉県以南では46トンで、前年（36トン）を上回った。なお、参画道県における代表的な漁況経過を表1に示した。

¹⁾ 主要港漁獲量を漁業・養殖業生産統計年報の値で引き延ばしているため、図7、図8を含めた漁獲量は全て推定値である。

²⁾ 水揚げ量は単純積み上げた数値。

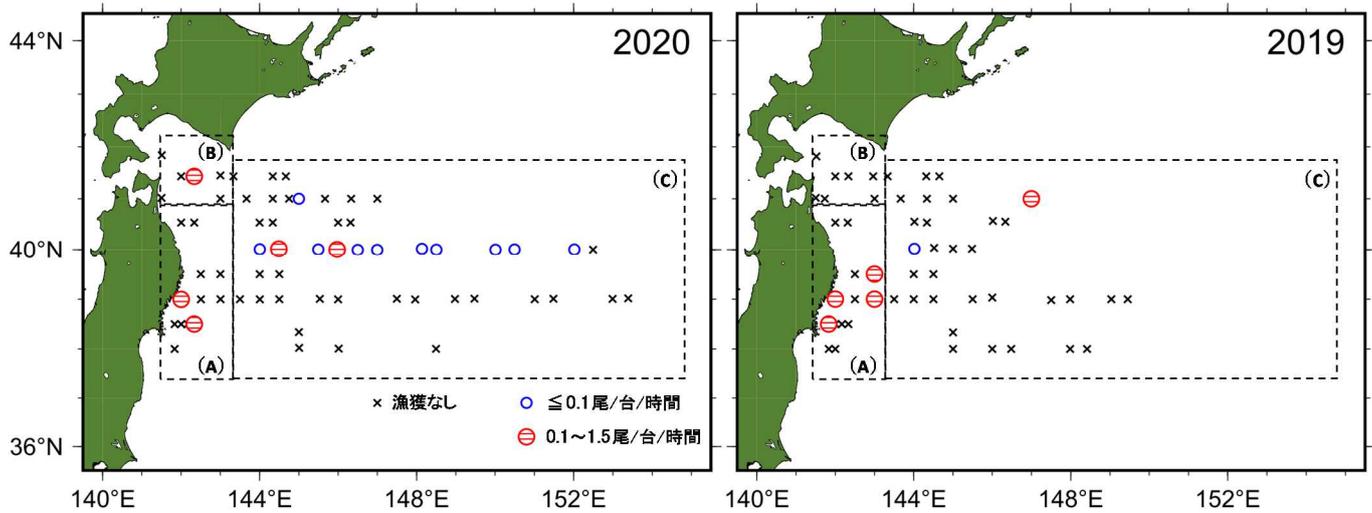


図1. 2019年、2020年6月上旬～7月上旬の太平洋におけるいか釣り調査によるスルメイカのCPUE（いか釣り機1台1時間当たり漁獲尾数）の分布
 ⊕は0.1～1.5尾/台/時間、○は0.1尾/台/時間以下の有漁点、×は漁獲なしを表す。
 破線で囲まれた海域は（A）三陸周辺海域、（B）津軽海峡～道南太平洋海域、（C）沖合域を示す

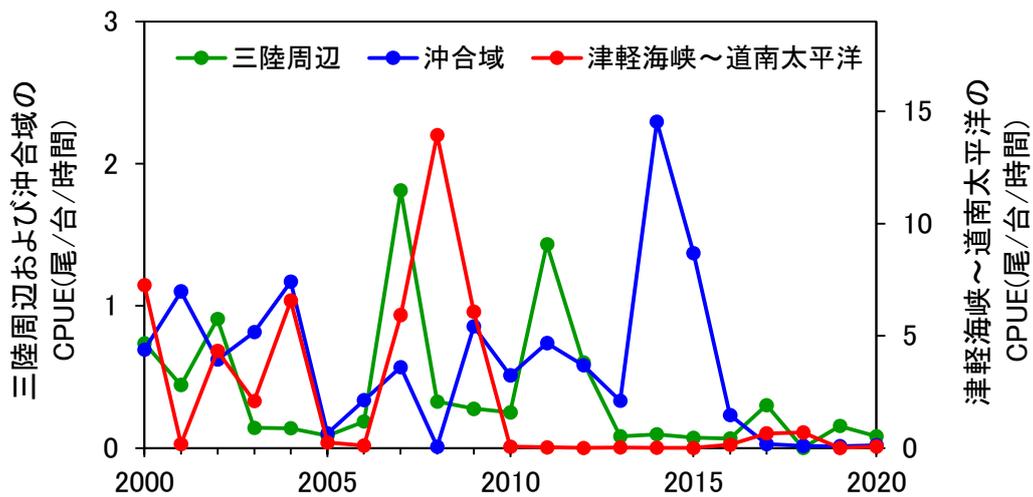


図2. 太平洋におけるいか釣り調査による海域別CPUEの年推移

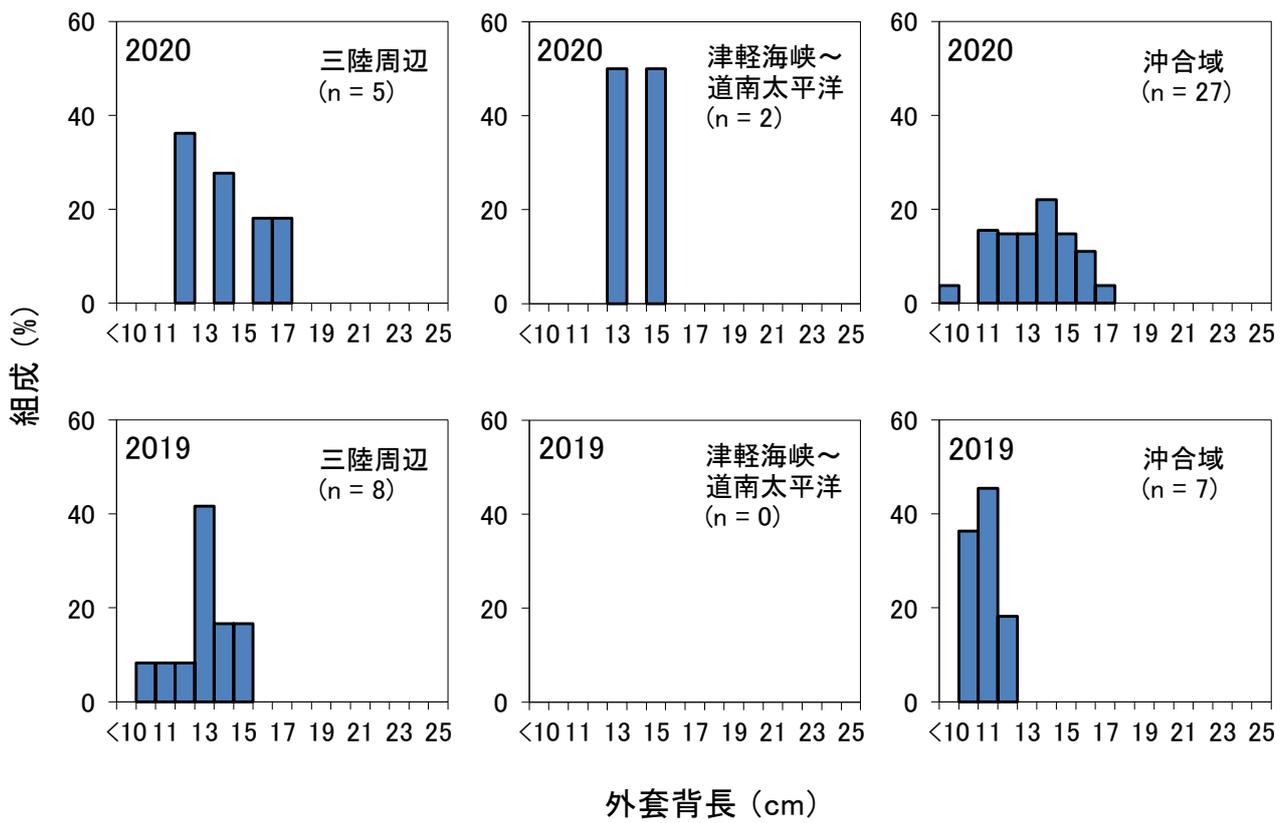


図3. 太平洋におけるいか釣り調査（三陸周辺海域・津軽海峡～道南太平洋海域・沖合域）で採集されたスルメイカの外套背長組成
各調査点の組成をCPUEで重み付け平均した後に全体の組成を作成している
nは測定尾数を示す

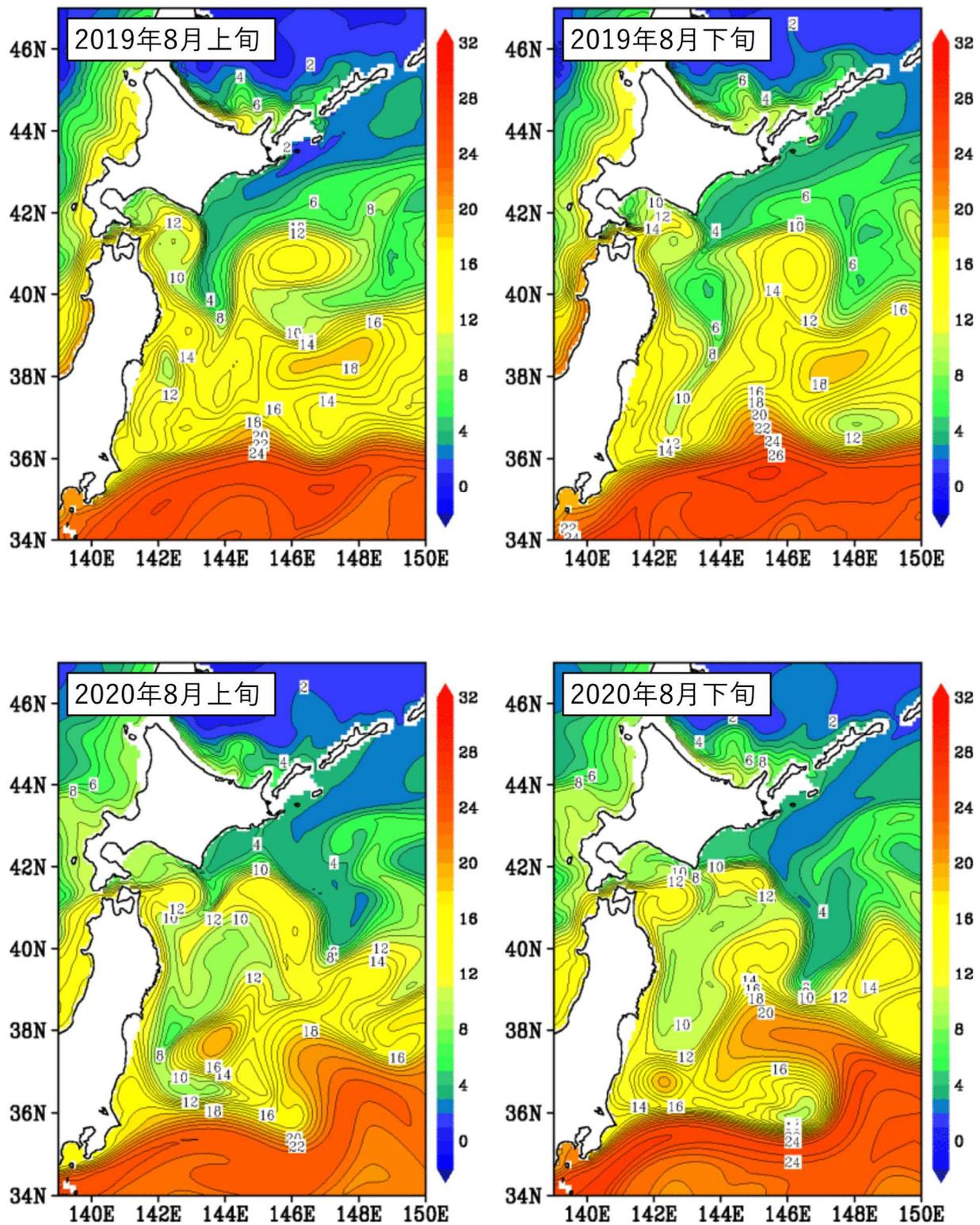


図4. 海況予測システムFRA-ROMSによる2019年、2020年の8月上旬と下旬の深度50mにおける水温（2020年は予測水温）
 深度50mはスルメイカの代表的な分布深度

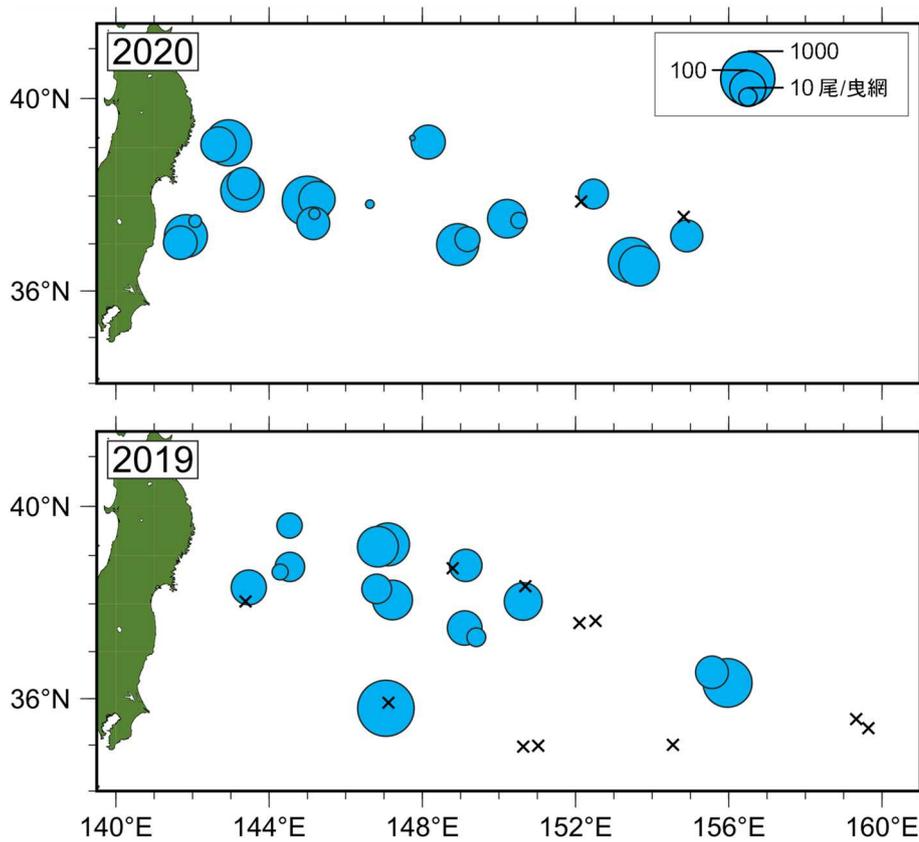


図5. 2019年、2020年5月上旬～6月上旬の太平洋における表層トロールネット移行域幼稚魚調査によるスルメイカのCPUE（30分曳網当たり漁獲尾数）の分布
 ×は漁獲が無かった点を示す

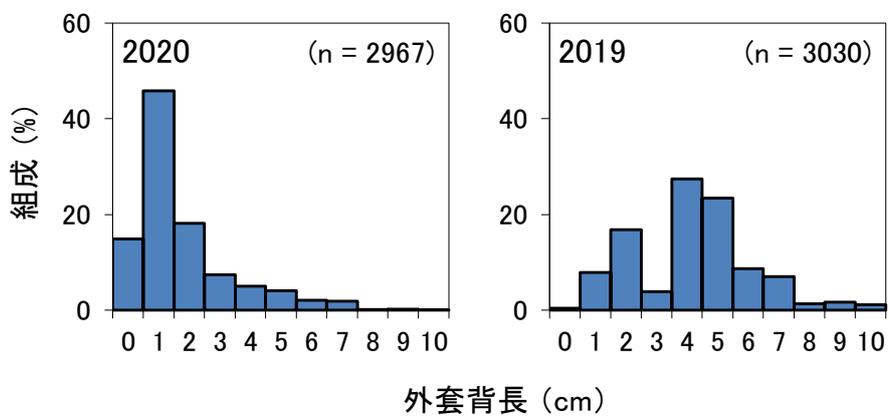


図6. 2019年、2020年5月上旬～6月上旬の太平洋における表層トロールネット移行域幼稚魚調査で採集されたスルメイカの外套背長組成

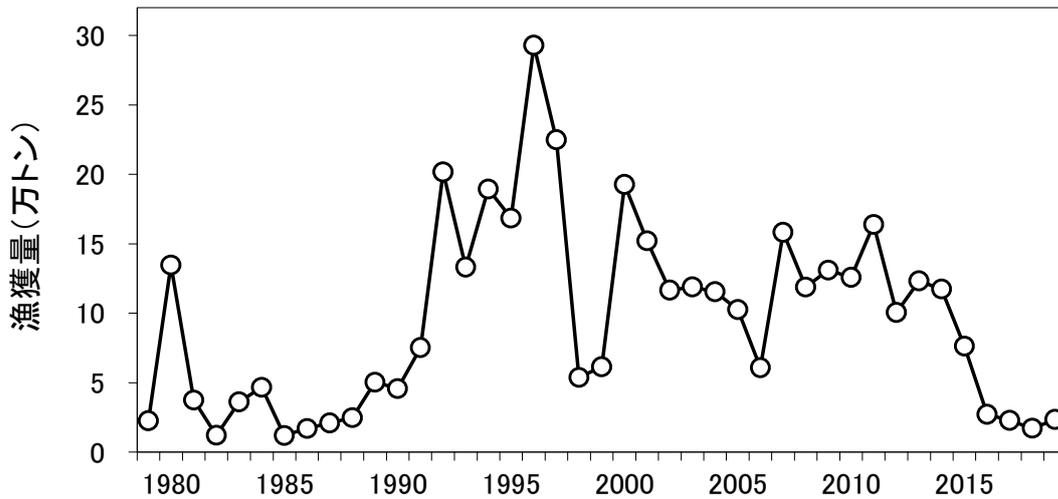


図7. 太平洋（根室海峡～オホーツク海を含む）におけるスルメイカの漁獲量（全漁業の暦年集計）の年推移

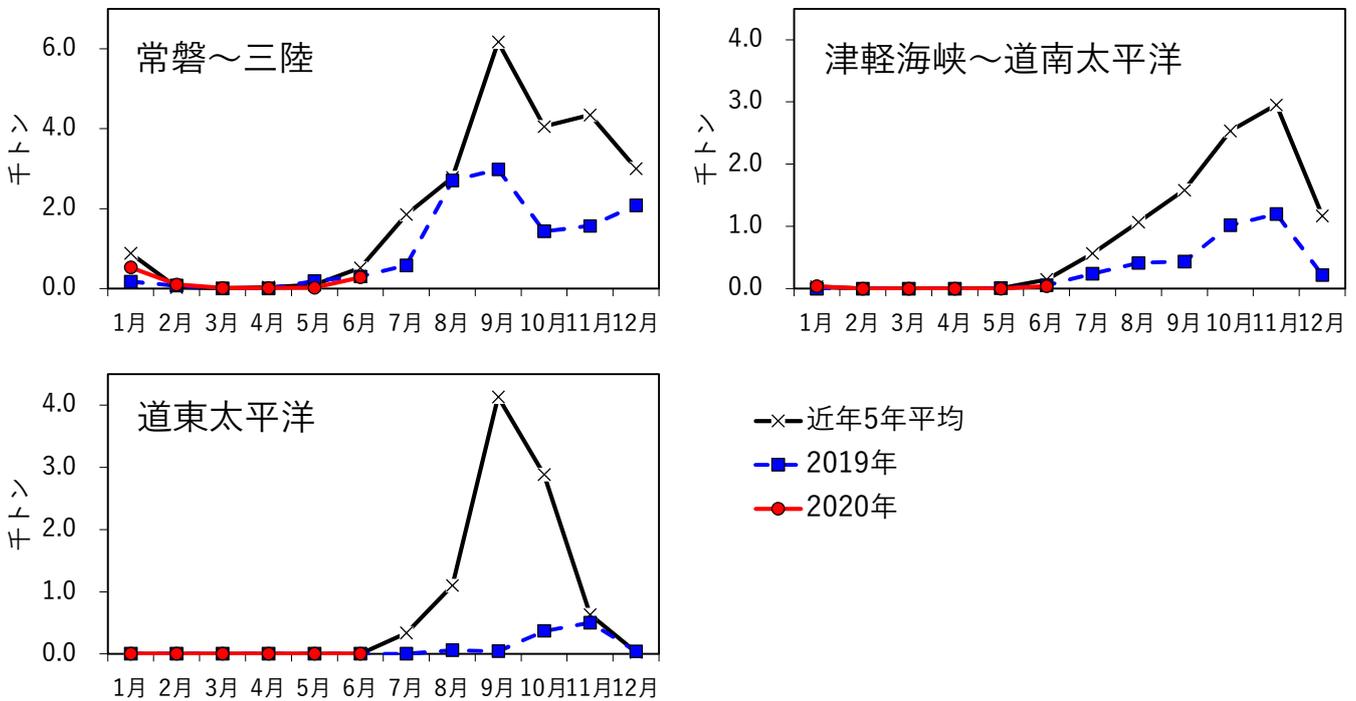


図8. スルメイカの月別海域別の漁獲量（生鮮）
 近年5年平均は2014年～2018年の平均
 （釣り・定置網・底びき網・まき網）

表1. 漁況経過（2020年5月～6月、一部未集計・暫定データ含む）

	漁況経過
北海道 道東	7月20日の時点で初水揚げはまだない（前年は根室で7月17日に初水揚げがあった）。
北海道 道南	6月の函館港への釣りによる水揚げ量は33トン（前年比94%）であった。CPUEは前年比110%であった。
青森	6月の白糠港への釣りによる水揚げ量は2トン（前年比13%）、CPUEは前年比89%であった。 6月の八戸港への釣りによる水揚げ量は45 kg（前年は5 kg）、CPUEは前年比900%であった。 6月の大畑港への釣りによる水揚げ量は0.6トン（前年比271%）、CPUEは前年比407%であった。また、八戸港への底びき網による6月の水揚げ量は31トン（前年比19%）であった。
岩手	6月の主要7港への釣りによる水揚げ量は0.2トンであった（前年は無し）。底びき網による水揚げ量は2.4トン（前年は2 kg）、定置網による水揚げ量は9.7トン（前年比64%）であった。
宮城	6月の主要10港への底びき網による水揚げ量は185トン（前年比282%）、定置網による水揚げ量は5トン（前年比118%）であった。釣りによる水揚げは無かった（前年も無し）。
福島	5月～6月の主要4港への沖合底びき網による水揚げ量は1.6トンであった（前年比77%）。
茨城	5月～6月の主要4港への沖合底びき網による水揚げ量は5トン（前年は0.3トン）、小型底びき網による水揚げ量は3トン（前年比218%）であった。
千葉	5月～6月の主要3港への定置網による水揚げ量は5トン（前年比104%）、釣りによる水揚げは7 kgであった（前年は無し）。
神奈川	5月～6月の主要2港への定置網による水揚げ量は0.1トン（前年比100%）であった。 6月の間口港への釣りによる水揚げ量は68 kg（前年比49%）、CPUEは前年比59%であった。
静岡	6月の仁科浜港への釣りによる水揚げ量は3トン（前年比107%）であった。CPUEは前年比126%であった。
三重	5月の奈屋浦港への中型まき網による水揚げ量は8トン（前年比444%）であった。主要2港への定置網による水揚げ量は2トン（前年比557%）であった。和具港への釣りによる水揚げは無し（前年は0.1トン）。
和歌山	6月のすさみ港への釣りによる水揚げ量は1トン（前年は21 kg）、CPUEは前年比141%であった。
高知	5月～6月の主要3港への釣りによる水揚げは無かった（前年も無し）。

注：CPUEは1日1隻当たりの漁獲量

参 画 機 関

地方独立行政法人 北海道立総合研究機構 水産研究本部 釧路水産試験場 函館水産試験場	三重県水産研究所
地方独立行政法人 青森県産業技術センター 水産総合研究所	和歌山県水産試験場
岩手県水産技術センター	高知県水産試験場
宮城県水産技術総合センター	一般社団法人 漁業情報サービスセンター
福島県水産資源研究所	(取りまとめ機関)
茨城県水産試験場	国立研究開発法人 水産研究・教育機構 水産資源研究所
千葉県水産総合研究センター	
神奈川県水産技術センター	
静岡県水産・海洋技術研究所	